

# Program Notes

寺西基之(音楽評論家)

## ロータ：ディヴェルティメント・コンチェルタンテ

---

ニーノ・ロータ(1911-79)は20世紀イタリアの作曲家である。彼は何より映画音楽の作曲家として知られ、「ゴッドファーザー」「ロミオとジュリエット」「ナイル殺人事件」「山猫」といったおなじみの映画の音楽を担当している。しかし、音楽一家の出で子供時代から楽才を発揮し、ミラノ音楽院でビツェッティに、ローマの聖チェチーリア音楽院でカセッラに学ぶといった正統的な音楽教育を受けた彼は、もともとクラシック系の作曲家として出発し、様々な書法を巧みに応用する職人技と自由な発想によって、交響曲、協奏曲、器楽曲からオペラまで幅広い分野の作品を多数手掛けた。

「ディヴェルティメント・コンチェルタンテ」はコントラバス独奏と管弦楽のために1968年頃に作曲された協奏作品で、コントラバスの名手フランコ・ペトラッキのために書かれている。ペトラッキはロータのすぐ隣の部屋で学生たちにコントラバスを教えていたが、ロータはその学生たちのひどい演奏や延々と続く音階練習を絶えず聞かされうんざりしていた。彼はそこで仕返しの手合をもって、この作品にジョーク的な要素や超絶的な技巧を盛り込んだといわれている。コントラバスの様々な表現上の可能性を生かしつつ、クーセヴィツキーの協奏曲やペトラッキの練習曲やグリエールの「タランテラ」などの既存のコントラバス曲のパロディも織り込み、全体をコミカルに仕立て上げた全4楽章の作品である。

第1楽章(アレグロ:アレグロ・マエストーソ)は3つの主題を持つ自由な協奏風ソナタ形式で、随所に半音ずらしたような想定外の音が現れる。終り近くに技巧的なカデンツァが置かれ、結尾は変口長調で終るかのような動きを見せた後に最後の最後で主調のイ長調に戻るところが面白い。第2楽章(マルチア:アツラ・マルチア、アレグラメンテ)はユーモラスかつ諧謔的で皮肉っぽい行進曲楽章。第3楽章(アリア:アンダンテ)は陰鬱な旋律主題を中心とするカンタービレ楽章。途中にはチャイコフスキーの「白鳥の湖」の楽想も引用される。第4楽章(フィナーレ:アレグロ・マルカート)はコントラバスの超絶技巧が炸裂するフィナーレで、最後はカデンツァを経てめくるめくばかりの終結に至る。

## ロッシーニ：ファゴット協奏曲

---

ジョアキーノ・ロッシーニ(1792-1868)はオペラ作曲家として知られるが、器楽ジャンルでも少年時代の一連の弦楽ソナタから後期の様々な編成の楽曲に至るまで多数の作品を残している。本日のファゴット協奏曲もそのひとつとされるが不明な点も残されている。

彼がファゴット協奏曲を書いたことは、イタリアのファゴットの名手ナツザレーノ・ガッティが1893年に死去した際の死亡記事をはじめとする幾つかの記録から知られていた。ガッティがまだボローニャの音楽院の学生だった1845年頃に、この音楽院のアドバイザーを務めていたロッシーニが彼の演奏を気に入り、彼の修了試験用の曲としてこの協奏曲を書いたという。ただその作品の存在は長らく確認できなかった。

しかし1990年代になってマントヴァ近郊のオスティーリアの図書館の19世紀の手稿譜のコレクションの中からその作品とおぼしき筆写譜が発見される。そして2001年にファゴット奏者セルジオ・アツォリーニの校訂で楽譜が出版され、以後ロッシェニのファゴット協奏曲として親しまれるようになった。ただ残されている史料が他人（しかも複数人の手が入った）による筆写譜だけであることや、当時としては異例の高音域が用いられている箇所があるなど、疑問点も多く、彼の真作かどうか確証はない。3つの楽章の調がそれぞれ変口長調、ハ短調、ヘ長調となっている点も変則的だ。とはいえ旋律やリズムなどにはロッシェニらしい特徴が現れており、ロッシェニのオペラの情景を思わせる点も多い。いずれにせよファゴットのヴィルトウオジティを發揮させた名品である。

第1楽章（アレグロ）は冒頭の管弦楽からいかにオペラ・ブッフア的で、ファゴットが入るところもオペラで歌手が登場してアリアを歌い出すかのよう。ピッツィカート上でファゴットが歌う行進曲風の第2主題もいかにもロッシェニ風だ。第2楽章（ラルゴ）はメランコリックなアリア風の緩徐楽章で、ファゴットのカンタービレが生かされる。第3楽章（ロンド：アレグレット）は軽妙な主題を中心とするロンドで、独奏には軽快かつ敏捷な動きが要求される技巧的なフィナーレである。

## ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第2番 変口長調 Op.19

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770 - 1827）の5曲のピアノ協奏曲のうち第1番ハ長調と本日の第2番変口長調が初期の作だが、第2番のほうが実質的に第1番より先に成立している（番号が2番目になったのは第1番より出版が遅れたため）。第1番に比べて第2番がまだまだ18世紀の古典的な様式の色濃いのもそのためである。この第2番にベートーヴェンが着手したのはまだ故郷ボンで活動していた1786年頃で、1790年には初稿が一応仕上がった。しかし彼自身その出来に不満で、1792年にウィーンに出て以降、幾度も改訂を施していく。最初の改訂は1793年で、この年には現在第1番ハ長調の協奏曲にも着手している。しかしベートーヴェンはそれでもまだ満足できず、第1番の作曲と並行して第2番の改訂を続けていく。そして1795年の改訂にあたっては終楽章が新しいものに差し替えられ、現行の形がほぼ整ったようだ。しかし以後も1801年の出版までに手直しが行われていった。結局着手から決定稿に至るまで実に15年近くもの歳月を要した作品ということになる。

ベートーヴェンがこれほどまで度重なる改訂を施していった背景として、この時期の彼がまずピアノの名手としてウィーンで名声を高めていたことがあろう。ウィーンで活動の場を広げようとしていた若き彼にとって、ピアノは大きな武器であり、私的な演奏会や公開の演奏会でこの作品を自らの演奏で取り上げるたびに、より完璧なものにしたい気持ちになったものと思われる。初期の所産だけに、様式的にはいまだ18世紀の古典的な作法の中にとどまっている曲だが、その中に息づく清新な精神には青年ベートーヴェンの意気込みが感じられる。

第1楽章（アレグロ・コン・ブリオ）は協奏風ソナタ形式。モーツァルトに連なる古典的な趣を持っているが、展開部での劇的な緊迫感のはのちのベートーヴェンを思わせるものがある。第2楽章（アダージョ）は深い情趣を湛えた主題が自由に変奏されていく緩徐楽章。第3楽章（ロンド、アレグロ）はカッコウの鳴き声を模したような軽やか主題を中心とした軽妙快活なロンドである。